



人がいる海岸が一番きれい

海開きの実行委員長を務める中村雅人さんは、地元浪板出身で、子どもたちから親しんだ海岸や砂浜の復活を誰よりも願っていた1人です。この海開きに合わせ、カウントダウンイベントを主催したり、SNSなどで情報発信したりと奔走してきました。「物心ついた時から遊んでいる浪板海岸。人と会いたかったら海に行く、といった感じでした。当時は小さかったからビーチが大きく見え

ましたが、いつも人でいっぱいでしたが、ユウギユウなイメージがありました。海開きをきっかけに、海岸に多くの人が訪れた様子を見ると「海岸清掃をみんなで一生懸命やって砂浜をきれいにしてきたつもりでしたけど、やっぱり海の雰囲気は人が作るんだな、と思いました。人がたくさん歩いている今日のビーチが一番きれいに見えます」と喜んでいました。地域の人も含めた仲間たちと、色々なチャレンジをして、ワクワクする海岸をみんなで作っていきたくて夢を語ります。

タカマスベース
中村 雅人 さん
まさと



海が子どもたちを育てる



吉里吉里学園 PTA 会長
芳賀 新 さん
あらた

吉里吉里学園 PTA 会長の芳賀新さんは「子どもたちには海で泳ぐ経験を通じて、楽しさと怖さを学んでほしい」と話します。「吉里吉里海岸のいかだは若旦那な会が作ってくれたもの。地域の大人や保護者が見守る中、海でどんどん遊んで成長してほしい」と子どもたちに期待します。

子どもから大人まで、町民の遊び、学び、交流の場として共にあり続ける海水浴場には、たくさんの方の思いや願いが詰まっています。

みなさんもこの夏「ただいま」「おかえり」「はじめまして」それぞれの言葉を交わしに、大槌の海を訪れてみませんか。



海水浴場を「語る」

当時から浪板海岸にサーフィンを構える杉本浩さん、管理人を務める宇夫方亨雄さん、木下勇夫さんらが、海水浴場の魅力について語りました。

当時はサーフィンの大会「大槌町長杯」も開催されていました。



2010年8月号は
こちらから ↓



海水浴場で「楽しむ」

当時の大槌町観光協会会長、山崎龍太郎さんが、カヌーやサーフィン、キャンプなどの楽しみ方を解説。町外に自慢できる財産があることを町民が認識し、共有し合うことの大切さを語っています。

当時はキャンプ用のレンタルテントも設置されていました。

